

坂野登先生を偲んで

菊池 聡 (信州大学人文学部)

日本応用心理学会の名誉会員であり、応用心理学会の理事をつとめられた京都大学名誉教授・坂野登先生が、2019年9月2日にご逝去されました。

先生は前年暮れより体調を崩され、ご自宅で療養生活を続けておられました。私事で恐縮ですが、9月に関西に出かける機会があり、4日午前中にお宅にうかがう約束をいただいて、久しぶりにお目にかかれるのを楽しみにしておりました。その、まさにその日その時間に、先生のご葬儀に参列することになった巡り合わせに、世の無常をこれ以上なく胸に刻み込まれた思いです。秋の近づきを感じさせ、さわやかに晴れ上がった京都の地で、坂野先生は昔の通り粋で気さくなお姿で、ご家族やご友人、多くの教え子に見送られて旅立って行かれました。享年85歳でいらっしゃいました。

坂野先生は、ライプツィヒ大学医学部臨床神経生理学部門で研究助手を務められ、帰国後、大阪経済大学助教授を経て、1970年より京都大学教育学部・教育心理学講座に赴任され、97年に退官されました。その後も、神戸親和女子大学文学部、名古屋女子大学文学部にて研究と教育に情熱を傾けられました。

先生が研究人生を通して取り組まれたことを、簡単にまとめることはとてもできません。ただ、私が身近に拝見したことに限るならば、それはパブロフの信号系理論や、ルリアの潜在的利き手の指標を基礎として、そこから独自に発展させたラテラリティをもとにした個人差の統一的な説明モデルの構築と、それによる人間理解であったと思います。また、先生は神経心理学や教育心理学の多くの研究成果を世に出されただけでなく、そうした研究に裏打ちされた教育観人間観から、示唆に富んだ多くの御著書を精力的に執筆してこられました。2017年に『利き脳論』(勁草書房)を上梓された後も、次の著作のご準備をされていたともうかがいました。

私は80年代から90年代はじめの学生院生時代を通して坂野先生に神経心理学のご指導を受け、坂野研究室の末席に参加しながら、無数の教えを受けてまいりました。忘れえぬ思い出として、大型計算機が吐き出した分析出力の束を持参した時のことがあります。坂野先生は、ひとつひとつ丁寧にデータを確認し、そしてしばしば考え込み、やがて興味深い解釈を見つけ出されました。その時の坂野先生の晴れやかな破顔一笑は、今でもありありと思い出されます。思えば、実験系の心理学研究の醍醐味は、測定事象の背景にある「何か」が、データ分析を通して目の前にほんの少しだけ現れてくれる、その瞬間に凝縮されるものかもしれません。そうした道をアクティブに突き進む坂野先生や研究室の諸先輩の後ろ姿を追い続けるうちに、私自身も気がつくところの道に深く入りこんでいったものと思います。

近年の脳機能研究は、最新テクノロジーを応用した脳活動イメージングを駆使したビッグ・サイエンスの性格を帯び、国際的な研究競争が繰り広げられています。坂野先生や私たちが取り組んだ心理学的ラテラリティ研究は、それら脳科学の奔流の前に、研究価値の問い直しが迫られているのが現実だと思えます。しか



坂野 登先生

し、私にとっては、現在の脳科学に強く見られる、脳というハードウェアの特定部位の活動に特定の心理機能を帰属させ、そこから機械的に心が生み出されると捉えるような方法論にどうしても違和感が残ります。この点についても坂野先生はクリアに指針を示して下さいました。先生は「脳がこころを動かすのではなく、こころが脳を動かすのだという視点」を重視し、「こころが脳を使うことによって、脳の働きはますます細やかに、そしてこころの指令に的確に応じることができるようになってくる」ことが重要であると繰り返し指摘しておられました(『利き脳論』)。こころによって脳の機能的構造化がなされていくという視点こそ、神経「心理学」における「こころ」研究の普遍性につながるのではないのでしょうか。

こうしたご示唆に限らず、私が坂野研究室から離れても、昔と変わらず厳しくも温かいアドバイスのメールをたびたびいただきました。そのひとつひとつが、現在の私にとってかけがえの無い財産となっています。思い起こせば、先生の教えを受けた20世紀終盤の京都大学の心理学は(おそらく今もそうでしょうが)、いくつもの学部の個性あふれる先生方がそれぞれ全く異なる分野でオリジナリティの高い研究教育を進めておられました。加えて同じ教育学部の中にも、全く異なる方法論を持つ分野が並立し、よく言えばバラエティ豊かであっても、いわばタコソポ的になりがちな状況が現出していたと思います。そんな中で、坂野先生は異なる分野も拒まずに招き入れ、多くの専門性の異なる学生院生が、ともに研鑽する機会を創り出す努力を惜しまれませんでした。そうした環境で広い視野から心理学を多面的に学べたことは、後に研究教育職に進んだ私たちにとって、何物にも替えがたい貴重な経験でありました。先生のご逝去の報は、そうした坂野先生の研究者教育者としての姿勢を受け継ぐことができたのだろうかと自分に問いかけるきっかけとなり、そして自らがまだまだ途上にあることをあらためて自覚する機会を与えていただいたものと思います。

本稿に掲載させていただいた坂野先生の肖像は、顔認知実験の刺激として撮られた一枚です。実習室に急造したスタジオで、学生院生が入れ替わり立ち替わり、いろいろな情動顔を撮影していたところに、好奇心満々の先生が顔を出されました。そして、自ら表情を作って下さった中の一枚「穏やかな微笑」です。この後、歯を見せないでもっと笑顔を見せてという指示に、堪えきれずに吹き出しそうになる様子もネガに焼き付いています。そう、坂野先生の周りは、常に好奇心と笑顔と活気に満ちあふれていました。坂野研究室は、いつも多くの学生や院生で賑わい、研究会が終わる宵には、先生はどこからともなく高価なワインを取り出し、夜もふけるまで尽きぬ話を続けるのが常でした。また、先生は多くの学生院生を宇治のご自宅にお招き下さりました。おいしい料理とワインをいただきながら、奥様もまじえて、共に夜遅くまで語らった日を懐かしく思い出される方も多いのではないのでしょうか。ワインと言えば、午前午後と続くコロキウムという名の大学院の演習では、合間に大学近辺で昼食の機会を持つこともしばしばありました。その時、先生が「ヨーロッパでは昼食にワインは常識だよ」といたずらっぽくおっしゃると、その一杯がまた午後の演習の活発な議論への呼び水となったものでした。

歳を重ねられても、水泳を続けられてますますお元気だった先生が、この世を去られたことは未だもって実感がありません。今回、私がかここに書けることはごくわずかでしかありませんが、2016年に坂野先生ご自身が語られたオーラルヒストリーが、日本心理学会のホームページ上の「心理学ミュージアム」に残されています。ここには長年にわたる研究史を語る坂野先生のお姿を動画でも拝見することができます。坂野先生と研究人生のひとつときを共にした多くの皆さんと、この思い出を共有できればと心から思います。

ただ、そんな提案を知れば、坂野先生は、いつもと変わらぬ照れくさそうな微笑をうかべて、ワイングラスを傾けるに違いありませんね。坂野先生、長年にわたり、ほんとうにありがとうございました。

■近年の主要出版物

利き脳論(2017) 勁草書房

不安の力—不確かさに立ち向かうこころ(2015) 勁草書房

二つのこころと一つの世界 心理学と脳科学の新たな視角(2012) 新曜社

脳バランス力とこころの健康(2009) 青木書店など。